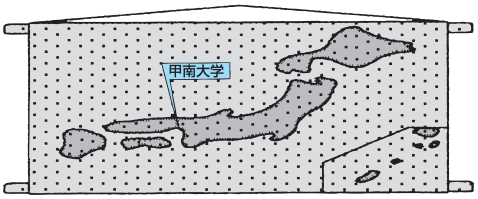
甲南大学・国際言語文化センター報　VOL.23 NO.2 2016

Zephyr

ゼフィール・にしかぜ

〈第64号〉



http://www.kilc.konan-u.ac.jp

《特集＊各国の異文化理解》

表紙の言葉

★所長からのメッセージ　異文化理解：アメリカの大学について …… 津田　信男 …… 2
〔英　　語〕*Cross-Cultural Understanding in Canada: "Variety is the Spice of Life!"* … Stanley KIRK …… 3
〔ドイツ語〕ドイツの異文化理解
～複言語と複文化の理念を実践する「ベルリン州立ヨーロッパ学校」～ … 藤原三枝子 …… 4
〔フランス語〕フランス語とフランス文化を知る …… ディディエ・シッシュ …… 5
〔中　国　語〕中国における異文化理解 …… 胡　金定 …… 6
〔韓　国　語〕韓国社会における血縁や親戚関係の呼称 …… 金　泰虎 …… 7
〔日　本　語〕ステレオタイプ？それとも人によって違うのか …… 谷守　正寛 …… 8

甲南学園創設者
平生釟三郎

「世界に通用する
紳士・淑女たれ」

Zeitschrift für Sprach- und Kulturforschungen
LANGUAGE AND CULTURE
Études des langues et cultures
語言与文化
언어와 문화

「英語＋１（第２外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年３回刊行）

LANGUAGE, CULTURE & SOCIETY

Learning a foreign language involves several steps: learning vocabulary and grammar, learning to read and write, learning to listen and reply in efficient ways. This is precisely the purpose of our grammar, reading and conversation classes.

However there is another important step, and this one requires much more time: we need to discover the culture that is the basis of the language. Communication habits always reflect a particular culture. For example, there may be some topics or issues to avoid talking about depending on the country where you are. The key is to become aware of social behaviours related to a specific language in order to avoid misunderstanding and conflict. So learning a language deeply involves learning new behaviours: it is an exciting challenge!

(Didier CHICHE
Thomas MACH)

異文化理解：アメリカの大学について

国際言語文化センター所長　津　田　信　男

アメリカの大学は、日本の大学と比べるとかなり違いがありますが、ここではいくつかの特徴を簡単に紹介しましょう。

Ⅰ．短大と４年制大学

アメリカの高等教育機関には短大と４年制大学があります。まず、短大は２つのコースに分かれます。一つは溶接、車の修理、美容・理容や警察官などの職業訓練を受けるコースで、もう一つは４年制大学への編入を目指して学ぶコースです。短大のメリットは、４年制大学に比べると授業料が安く、少人数教育を受けられることです。成績優秀者には、卒業後４年制大学に編入した際、奨学金が授与されるチャンスもあります。州立大学の場合、州内の住民（resident）であれば授業料が安く、州外の住民や留学生（non resident）の授業料は州内の住民の授業料の約 2.5 倍になります。

Ⅱ．専攻

アメリカの大学では、普通１年生は一般教養から履修するので、専攻を自由に変えても問題はありません。よく１年生で undeclared major（専攻なし）という学生がいます。ただし、専門課程に入る前にきちんと専攻を決めておかなければ、無駄な単位を取ることになります。４年制で学生数が２万人規模の大学であれば、100 種類以上の学科から専攻を選ぶことができます。

Ⅲ．授業形態

セメスター制（２学期制）４年制大学のアメリカ人学生は、１学期平均 15 単位（甲南大生は平均 20 単位）くらいを履修しています。１科目３単位の（甲南では４単位に換算される）授業であれば、通常 50 分の授業を週３回行います。日本の大学のように通年で１科目を終了するものはなく、１学期で授業が終わるので、かなりハードです。１つのクラスにつき教科書の約 20 ～ 30 ページを読む課題が毎回あるので、週 60 ～ 90 ページを読むことになります。

日本の大学と違ってアメリカの学生は授業中によく質問をし、発言します。特に分からない場合は、質問しないと、講師は学生が分かっていると判断します。「留学生は、英語が母語ではないので授業を十分には理解できていないだろう」と考える講師はいませんので、「私は留学生なので先生に配慮してもらえるだろう」といった甘い考えは捨てなければなりません。講師はどの学生に対しても平等です。言い換えれば、留学生を特別扱いしません。

Ⅳ．学生生活

私は何人ものアメリカ人の学生と一緒にオフキャンパスのアパートで生活したことがありますが、朝シャワーを浴びて、シリアルを食べて授業に出かける学生が多かったです。授業と授業の間や夜図書館に行くと、熱心に勉強している学生の姿をよく見ました。ただし、金曜日の夕方になると大半の学生は一切勉強をせず、友達と一緒にパーティをしたり、夜遅くまで遊んだりしていました。アメリカ人学生というと、このように勉強するときは一生懸命して、遊ぶ時は徹底して遊ぶといったメリハリのある生活をしているという印象があります。

Ⅴ．アメリカ留学

本学の留学制度を利用してアメリカに留学したいと考えている学生も多いかと思います。留学にはいろいろなチャレンジがつきものですし、大きな犠牲を伴うこともあります。しかし、皆さんが目標を持って努力され、留学を通して価値ある体験を積まれることを願っています。

“The whole of life is learning, therefore education can have no endings.” (E.C. Lindeman)

Cross-Cultural Understanding in Canada: "Variety is the Spice of Life!"

国際言語文化センター准教授　Stanley KIRK

Key vocabulary: *diverse, immigrant, variety, intercultural, racist, conflict, discrimination, minority, majority, exclude, immigrate, multiculturalism, respect, appreciate, creative, proverb*

What is your image of Canada? Is it beautiful nature? A safe country? Maybe the strongest image of Canada these days is a culturally **diverse** country that has many **immigrants** from a wide **variety** of countries and cultures living together peacefully. This image of Canada is mostly true now, but it was not always so.

In fact, during most of its history, Canada was a very **racist** country with a lot of **intercultural conflict** and **discrimination**. The first big intercultural conflict was between the English and the French when Canada was just beginning. This conflict led to war which the English finally won. As a result, many French Canadians had to escape from Canada, and most of those who remained had to live in one part of Canada, which is now the province of Quebec. As a **minority**, they had to fight hard to protect their own culture and language.

English Canadians then became the clear **majority**, and they tried hard to keep Canada English and white. White English-speaking immigrants from England and the United States were welcomed to Canada, but non-English and especially non-white immigrants were **excluded**. Some found a way to enter Canada but were treated badly, and many gave up and left. Others stayed but had to live together in the same areas to protect themselves. Most of them could not get good jobs, so they had very hard lives.

However, the experience of World War 2 and the very sad situation of war **refugees** caused many English Canadians to change their thinking about immigrants. Gradually, Canada began to open its doors to **immigrants** from many countries. More people from all over the world immigrated to Canada to find a better life for themselves and their families.

In 1971, Canada officially adopted **multiculturalism** as a national policy. This policy encourages immigrants to keep up their own languages and cultures. It also encourages all Canadians to **respect** and **appreciate** cultures that are different from their own, and to try to learn from each other. As a result, now Canada is becoming more culturally diverse year by year.

Did you know that more than 20% of Canadians are immigrants and speak English not as their first language, but as their second language? In big cities, the number is much higher. For example, more than 50% of the people who live in Vancouver were born outside of Canada and speak English as their second language! If you take a walk in Vancouver and listen, you will hear many languages being spoken, and you will hear many people communicating with each other in broken English. This might seem strange at first, but soon you will start to feel the **creative** energy of different cultures living together and trying to understand each other. This is what makes life in a multicultural society so exciting, isn't it? As an old **proverb** says, "Variety is the spice of life!"

ドイツの異文化理解

～複言語と複文化の理念を実践する「ベルリン州立ヨーロッパ学校」～

国際言語文化センター教授　藤　原　三枝子

ドイツの首都ベルリンは、歴史的にも文化的にも興味の尽きない都市です。皆さんは、中学校や高等学校で、ベルリンの壁やその崩壊、その後のドイツ再統一について学んだことと思います。冷戦の象徴的存在であったベルリンの壁の崩壊は、現在も進んでいるヨーロッパ統合の動きに大きな弾みとなりました。ヨーロッパ連合の理念は、「多様性の中の統一（United in diversity）」です。どの国の言語も文化も、等しく大事にするという考え方です。1992 年設立の「ベルリン州立ヨーロッパ学校」は、この理念をよく表しています。

ベルリン州立ヨーロッパ学校は、「一緒に、お互いから、お互いのために学ぶ：miteinander – voneinander – füreinander lernen」をモットーに、ドイツ語ともう一つのパートナー言語で授業を受け、双方の文化を学ぶことを目的として設立された公立の学校です。パートナー言語は、英語・フランス語・イタリア語・ポーランド語・ギリシャ語・スペイン語・ポルトガル語・トルコ語・ロシア語の９言語です。例えば、フランス語をパートナー言語するメルキッシュ・ヨーロッパ学校の小学校１・２年生の時間割は、次のようなものです：

授業科目	１年生	２年生
第１言語（独・仏）	7	7
パートナー言語（独･仏）	3	4
数学（独）	5	5
事実授業（仏）	3	2
スポーツ（独・仏）	2	2
美術（独・仏）	1	2
音楽（独・仏）	1	1
合計授業時間	22	23

現地で日本に関して行った授業風景：2012 年 12 月

スポーツや美術、音楽は、その時々で、ドイツ語で行われたりフランス語で行われたりします。上の写真は、2012 年 12 月に、イタリア語をパートナー言語とするフィノー･ヨーロッパ学校で、日本に関する授業をしたときの風景です。ドイツ語を母語とする子供たちと、イタリア語を母語とする子供たちの数は半々、クラスの先生もドイツ語を母語とする先生とイタリア語を母語とする先生の二人が担任です。イタリアの学校との文化的な交流、他のパートナー言語の学校とのイベントも豊富にあり、子供たちは、自分の母語とパートナー言語だけでなく、他の８つの言語とその文化にも自然と慣れ親しんでいきます。

小学校修了後は、中学校・高等学校段階でも、継続して同じシステムで学習を続けることができます。興味のある方は、英語をパートナー言語とする チャールズ・ディケンズ・ヨーロッパ学校のサイトにアクセスしてみてください。英語とドイツ語で情報を得ることができます。
http://www.charles-dickens-gs.de/index.php

ベルリン州立ヨーロッパ学校は、多くの言語と文化に触れることが異文化理解の根底にあるという理念を実践しています。

フランス語とフランス文化を知る

国際言語文化センター教授　ディディエ・シッシュ

フランス語学習の目的のひとつは、フランス語での基礎的コミュニケーション能力の習得です。現代の世界で、国際交流や海外旅行の機会の増加とともに、フランス語を使う機会は少なくありません。ただ、**効果的にフランス語を使うためには、その背景にある文化と習慣を意識することが不可欠だと言えるでしょう。**

特に、フランス文化においてはマナーが大事で、注意すべき点がいくつかあります。例えば、初対面の人とは、まず握手します。このとき、目をそらしたり、いい加減な握り方をすると、あまり 良い印象を与えません。なぜなら、偽善的な印象を与えるからです。フランスでは、人の目を見ない人は、不誠実だと思われてしまいます。また、フランス語でコミュニケーションをする時、対話する相手と自分との関係が、日本にいる時と全く違うことがわかるでしょう。**フランスでは、人間関係において「上下」という意識があまりありません。年上の人への敬語、店員の客への敬語などが意識される場合が少ないということです。これは、フランスが日本のような「縦社会」ではないことに由来しています。**フランス語には二人称代名詞として、Tu と Vous の２種類がありますが、この２つの使い分けは、「上下関係」ではなく、対話者間の心的距離の違いと言ってもよいでしょう。

また、フランス人との会話の中で、沈黙は「賢者の証」ではありません。日本語には「沈黙は金なり」という諺があるようですが、**フランス語において沈黙することは、敵意の表れか、愚か者と思われてしまいます。また、意見を聞かれたとき、「わかりません」という答えは絶対に避けましょう。**無知な人だと思われてしまいます。言葉少なに控えめでいるよりも、しつこい程、自分の意見を述べるほうがいいとさえ言えます。

ただ、会話の中で「タブー」がないと思ってはいけません。文化ごとにタブーは異なります。例えば、日本では、子供の通う学校や親の勤める会社の名前を聞かないほうか良いようですが、フランスでは、そんなことはありません。逆に、フランス人は「プライバシー」の意識が非常に強いので、信仰など個人の内面についての話題は避けたほうがよいでしょう。また、女性の容姿を褒めたりするのも控えたほうがよいでしょう。くだけた表現を使う場合も、慎重にしないと、話し手の「品性」が疑われてしまいますが、これは、どの文化でも同じです。**言葉使いやライフ・スタイルも社会的な階層によりさまざまであるため、外国人は、自分の用いる外国語の表現には十分注意して、できるだけスタンダードな表現を用いることが賢明です。**

また、フランス人は政治に大きな関心をもっていますので、現代の日本の政治体制、日本の社会状況に関する説明ができることが望ましいでしょう。**海外に行く前に、様々な質問を想定して、前もって考えをまとめることは、外国語学習においてだけでなく、社会に出てからも、きっと役立つはずです。**また、グローバル化とともに、海外での日本文化への興味が高まってきたため、日本の漫画・映画・料理などについての質問に答えることができると、会話の「潤滑油」になると考えられます。

心を開いて、外国語とその言語を培っている文化を発見することは、海外の人々とのやりとりにおいて役立つのみならず、皆さんの人生を豊かにすることに繋がります。**フランス語には、savoir-être という言葉があります。être とは、フランス語で「実存」・「存在」という意味の最も重要な言葉です。「savoir-être」を直訳すれば、「（自分自身の）ありかた」となります。**外国語学習には時間と実践力が不可欠ですが、学習者にとって、外国語の学習が何らかの面でプラスにならなければ意味がありません。**複数の外国語を学習し、それぞれの言語文化を理解することが、学習者の生活や考え方、さらには人生を充実させることに繋がります。これこそが、外国語学習の究極の目的であると言えるでしょう。**

中国における異文化理解

国際言語文化センター教授　胡　　金　定

「異文化理解」とは、文字通り「異文化」を理解するということですが、近年国内外においてその重要性が声高に言われるようになりました。

地球規模で物を考え、問題を解決しなければならない時代において、例えば、地球温暖化や伝染病、民族紛争や宗教関連のテロリズム等、一国の力では解決することのできない問題が山積みです。これらの問題を解決していくには、お互いに文化や思想の違いを理解し、尊重し合うことにより、力を合わせて立ち向かう必要があります。

異文化を理解する、というのは人によっては大変難しいことかもしれません。日本では宗教や言葉、伝統、慣習、地域性など、自分とは大きく違う文化を持った人と出会う機会はそう多くはないため、いざ出会った時に躊躇してしまう人も少なくないはずです。「自分とは違う」と排除せず、忍耐と寛容、想像力、理解力をもってお互いに理解し合う努力が求められます。個々人の努力が国民と国民、国と国の異文化理解につながります。

広大な中国では、日本や諸外国とは大きく状況が異なります。漢族と55の少数民族を含む56種の民族によって構成される多民族国家であり、王朝体制から共和制、社会主義国家へ、農耕社会から工業化、都市化社会への移行の過程の中で、多元文化共生の社会が形成されました。中国の「多元文化」というのは、民族や宗教のように大別されるものだけでなく、男女、年齢、更には個人で異なるものだと考えられます。

総人口13億6800万人の内、漢民族が占める割合は91.5％で少数民族は8.5％と少数ですが、55の少数民族がそれぞれのアイデンティティを持っています。中国の民族学者費孝通は「中華民族とは中国領域内の56民族の民族実体であって、56民族の総称ではない。つまり中華民族の一体感は、普通の民族一体感より一段上のレベルのもので、いわば中国領域内に住む諸民族は二重のアイデンティティを持つ」と論じました。

費は「我々は漢民族の形成について未だに学問的な説明ができないでいるが、この民族が現在、世界で最も人口の多い民族となったのは、決して漢民族の祖先の自然な繁殖の結果ではなく、中国の歴史が発展する中で、もともと漢民族ではなかった人々を吸収した結果である」と主張。異なるアイデンティティを持った人々が融合や分化を繰り返しながら現在の民族構造に至ったとし、「中国の諸民族のあり方は多元的であると同時に一体であり、自然発生的だった中華民族は、列強と対抗する中で自覚的な民族実体になった」と論点を示しました。費の見解は中国の民族政策に大きな影響を与えただけでなく、国内外の学界でも広く関心と討論を引き起こしました。

中華民族という総体を形成している各民族の関係は密接でありながら、均一的なものでもありません。同じ中国国民であるという大前提の上で漢民族×少数民族、少数民族×少数民族の異文化を理解し合うのは、他国のそれとは違った難しさがあるように思います。

どの国においても、まずは自分の固定観念や先入観を取り払い、身近な人と理解し合うことが「異文化理解」への第一歩です。自分が“絶対”ではないという謙虚な心、相手に対する寛容な心の大切さも授業の中で教示していこうと思います。

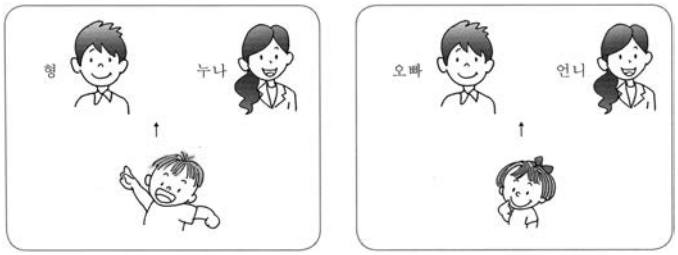
韓国社会における血縁や親戚関係の呼称

国際言語文化センター教授　金　　泰　虎

韓国社会では、血縁や親戚関係にない対人関係において、あたかも血縁、あるいは親戚関係にあるかのような呼称を用いることが多いです。以下では、具体的にその呼称の実例を取り上げ、韓国文化理解に繋げたいと思います。

韓国社会における「언니（オンニ）」（お姉さん）、「오빠（オッパ）」（お兄さん）、「누나（ヌナ）」（お姉さん）、「누님（ヌニム）」（お姉様）、「형（ヒョン）」（お兄さん）、「형님（ヒョンニム）」（お兄様）、「이모（イモ）」（おばさん：母方の女姉妹）と言う語彙は、血縁や親戚関係を示す呼称です。しかし、これらの呼称は血縁や親戚関係にない間柄でもよく用いられています。とりわけ大学生を含む若い人々の間でよく耳にする呼称としては、「언니（オンニ）」、「오빠（オッパ）」、「누나（ヌナ）」、「형（ヒョン）」が取り上げられますが、先輩と後輩の関係、引いては同学年の人間関係においても使われています。これらの呼称は日本より若干複雑ですので、次の（図１）で、その呼び方について確認しましょう。

つまり、女の子にとっての目上の女性は「언니（オンニ）」、男の人は「오빠（オッパ）」、一方、男の子にとっての目上の女性は「누나（ヌナ）」、男の人は「형（ヒョン）」と呼びます。大学生の間では自分よりたとえ１歳でも上であれば、この呼称を用いる傾向にあるため、上級生に対しては当たり前と言えます。しかし、同じ学年の人に対して用いるのは、浪人をしたり、社会人になったりしてから大学に入学したケース（Case）の年上の同学年が考えられますが、他のケースもあります。韓国社会では一般的に男は20歳になると、兵役の義務を課す対象になります。ほとんどの男子大学生は在学中に休学をして入隊をします。現在、その兵役の服務期間は約２年です。休学して兵役を終えた男子大学生が復学をすれば、同学年であっても軍隊に行っていない現役の学生と比べて、おおむね２歳くらいの差が生じます。そこで、復学している男の先輩に対して、軍隊に行っていない現役の男子大学生は「형（ヒョン）」、女子大学生は「오빠（オッパ）」と呼びます。



（図１）姉と兄の呼称

特に、社会人の男子の場合は、大学生の間で用いる呼称より高いレベル（Level）の敬語の「누님（ヌニム）」（お姉様）、「형님（ヒョンニム）」（お兄様）を使う傾向にあります。例えば、意気投合した間柄で年下の人が年上の人に、会話の中で「これから「형님（ヒョンニム）」と呼ばせていただきます」という言い方をします。

これだけではなく食堂においても親戚関係の呼称を用います。一般的に食堂で接客をする未婚の女性は「아가씨（アガシ）」（お嬢さん）、既婚の女性は「아줌마（アジュンマ）」ないし「아주머니（アジュモニ）」（おばさん）と呼びます。しかし、最近は「이모（イモ）」（おばさん：母方の女姉妹）と呼ぶことが増えてきています。この呼称の理解が十分ではない場合、例えば韓国ドラマ（Drama）における食堂シーン（Scene）の中でお客さんが「이모（イモ）」と呼べば、その食堂は「母方の女姉妹」がやっていると見なしてしまうでしょう。もちろん稀には、実際「母方の女姉妹」がやりくりしているケースもあります。しかし、実際には親戚関係のない人が運営している食堂で、そのように呼ぶ場合がほとんどなのです。さらに、親しい友人の両親に自分の父と母のような呼び方、すなわち「아버님（アボニム）」（お父様）、「어머님（オモニム）」（お母様）と言うこともあります。

以上、韓国社会ではそもそもは家族や親戚の間で用いてきた呼称がその枠を超えて社会の対人関係にまで広がっています。社会における親疎関係を血縁や親戚関係に結び付けるのは、血縁や親戚関係を重視する意識の表れであり、韓国ならではの特徴です。その根源は、族譜（系図）を重んじ、家門、一族、血縁の親や兄弟、親戚を大事にしてきた前近代の儒教的潜在意識にあると考えられます。

ステレオタイプ？それとも人によって違うのか

国際言語文化センター准教授　谷　守　正　寛

「長崎の人？じゃ、カステラが好きなんだ」などと聞いたらどう感じるでしょうか。まさか長崎人だからって思い込みで決めるのは良くない、そんなものは人によって違うだけだろう、と思うはずです。ここでは、日本の異文化理解というテーマなので、国境を越えた異文化ではなく、日本国内における地域間のある種の異文化について一言語ることにします。

地域性を分かりやすく行政区域で分けてその県民性等を述べると、ステレオタイプな見方になって、人を色眼鏡で見ていて、偏見の持ち主にされてしまうかもしれません。一方、「人によって違う」と賢明な考えを述べて個人を重視すると、偏見のない良識ある善人にでもなれるでしょう。

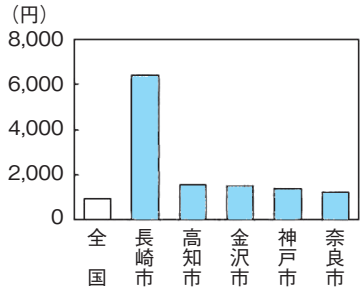
あそこではだいたいこんな人が多いとか言うのと、そんなのは人によって違うだけだと言って片付けてしまうのと、どっちが本当でしょうか。たしかに、ステレオタイプな見方は偏見だと批判されやすく、個人を尊重しているように振る舞う方が、人の考え方として知的なように思われます。果たして人はそれほど個々で独自性を持つものなのか…。

「あなたの県では皆お菓子が好き？」などと聞かれれば、人によるよと答えるでしょう。私は好きだが友人はそうでもないというふうに、個々人のレベルで見ると、たしかに人によって違うとしか言いようがないものです。

総務省統計局の家計調査（二人以上の世帯）「品目別都道府県庁所在市及び政令指定都市ランキング」（平成 25 年（2013 年）～ 27 年（2015 年）平均）を見ると（下図も）、消費の文化という視点から、面白い位相が顕現してきます。菓子類、和生菓子、ケーキ、プリン、スナック菓子、アイスクリーム・シャーベットへの６品目の支出金額が、全て金沢市が全国第一位と知って、「へぇ、金沢の人は甘いお菓子が好きなんだ」というステレオタイプな見方が生まれてしまっても、それは決して間違った固定観念ではないのです。

金沢にも甘いお菓子が好きでない人もいるでしょう。ミクロなレベルで個々人を見ただけでは、「人によって違う」と言うのが正論に聞こえるわけで、マクロな視点からは厳然たる事実として差が表れます。しかも、この傾向は持続的に安定していればもはや個人の問題ではないでしょう。ちなみに、金沢市はチョコレートでも第二位なので、やはりそうなのかと一層思ってしまいます。

カステラへの支出が多い長崎市



一方、長崎市は、図を見ての通り、同じ甘そうな菓子でも、断トツにカステラ好きなのが分かります。これは歴史的背景が個人の嗜好にまで浸透しているのかもしれませんが。その反動からか、和生菓子と煎餅といった日本の菓子消費が、全国で下から第二位と全く対照的です。１人の市民を見ても分からないような事態が、このように、背後に一定の地域性（ここでは食の異文化）として潜んでいるわけです。これの国別版がいわゆるよく言うところの異文化なのでしょう。

1968 年に森永製菓エールチョコレートの TV コマーシャルのコピーに「大きいことはいいことだ」というのがありましたが、これだけ軽自動車が普及するのを見ると、異文化がじっくりと変容することも分かります。日本語において個人を越えて表れる異文化の一種が方言とも言えます。これは、やはり「人によって違う」とは言いにくいもので、食文化のように、やはり人々に共通してインプットされたものに違いありません。

甲南大学・国際言語文化センター報『ZEPHYR』　第23巻　第２号（通算64号）　2016年７月１日
編集・発行　甲南大学・国際言語文化センター　神戸市東灘区岡本８丁目９番１号　電話(078)435-2326